

Title	星月夜
Author(s)	新村, 出
Citation	天界 = The heavens (1923), 3(32): 252-254
Issue Date	1923-08-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/159960">http://hdl.handle.net/2433/159960</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 天 界 第三十二號 (第三卷) 大正十二年九月號

## 星 月 夜

京都帝國大學圖書館長 新村 出

中古から星のかゞやく夜の空を星月夜といひならはしてゐる。月夜にまがふ星空を形容したものゝすれば、星のためには月に對して見劣りがするこいふ感を起させぬでもない。星月夜こいふ語は、歌の用語としては、平安朝の末期からあらはれてゐるが、稍用ゐられ始めたのは、室町時代以後であらう。鎌倉初期の八雲御抄には、まだ星月夜こいふ詞を擧げてゐない。藻塩草こいふ歌語辭典からその名が始めて出てゐるのだから、割合に後代に至つて知られた詞とすべきである。然し出典は平安朝中期の散文にまでは遡り得るのである。

今昔物語卷第二十七の第五節に「冷泉院水精成人形補誦語」と題する話の中に、  
翁和ヲ立返テ行クヲ星月夜ニ見遣ケレバ

こいふ文句があるのが出典として一番古い。歌の方では、鳥羽天皇の永久四年十二月に顯仲、仲實、俊賴等男女七人の作家の歌を集めた永久四年百首、また堀川次郎百首こいふ小さな歌集に、皇后宮女房で、肥後守定成の女なる肥後ミ呼ばれた女房の雜歌中、星を詠じた名歌が人口に膾炙してゐる。

我ひこり 鎌倉山を越行ば

星月夜こそうれしかりけれ

夫木集(十九雜一)にも出てゐる。「越行ば」を或本に「越來れば」としてある。何しろ上は萬葉より二十一代集まで星月夜こいふ句は見當らぬので、この歌はかたがた有名になり、あちこちに廣く引用された。謠曲の「調伏會我」には賴朝が「明るを待や星月夜」とうたふと、立衆の上歌に「鎌倉山を朝立てく」、まだ有明の影のころ……」

こつゞけるが如く、枕詞のやうにあつかはれた例もある。

應永二十二年の爲尹卿千首には、二例ある。爲尹は定家の子爲實の曾孫で冷泉家の嫡々である。戀二百首のうち寄星戀として

心をぞしるべに來つる星月夜。

さてもくまある道のささはら

と詠じたのが一つ。もう一つは、夏百首で水上螢の題詠で、

池の面にうかぶ螢の星月夜。

水くからからず更にみえつゝ

とある。共に拙い作である。爲尹とは同時代で稍後かと思ふ作に、東福寺の禪僧に有名な正徹書記の

荒れ渡る窓の北なる星月夜。

また燈火をならべてぞ見る

といふやはりつまらぬ歌がある。以上の三首は皆室町初期の作歌である。

然るに平安朝末期より鎌倉初期へかけての女性歌人に建禮門院右京大夫といった人の家集に

月をこそながめなれしか星の夜の

深きあはれを今宵知りぬい

といふ即興の歌が一首ある。題詠でないから何の技巧もなく、唯卒直に星夜の美を讃仰した作たるに過ぎない。然しこれだけの讚美でも、これまでの歌人は、星夜に對してしてくれなかつたのである。

右京大夫は書道の傳統で有名な世尊寺家の娘である。源氏物語奥入といふ簡単な源氏の註釋を作つたり、夜鶴庭訓抄といふ書道のことを述べたりした人の息女である。この庭訓抄も多分彼女の爲に書いたものと思はれる。彼女は高倉天皇の中宮建禮門院に仕へ、後宮中をお暇して、平家没落に遭ひ、後白河法皇の大原御幸のあつた文治二年の春より少し前、すなはち元年の秋のころ寂光院に門院を訪ひまゐらせたこともある。その冬琵琶湖畔にさ

すらへて、比叡の麓坂本あたりにて、或晩真夜中に起き出でて星月夜を見あけて上記の歌を詠んだのである。その題詞を見るに、日本の文學ではとにかく古今獨歩ともいふべき文字がうかゞはれる。

十二月の朔日の頃なりしやらん、夜に入りて雨も雪もなく打散りて村雲さわがしく一つに曇りはてぬものから、むら／＼星うちきえしたり。ひきかづき臥したるきぬを、更けぬる程、丑二つばかりなきにやと思ふ程に、ひきのけて空を見上げたれば、殊に霽れて、淺葱色なるに光こごごしき星の大きながむらもなく出でたる、なのめならず面白く、紺の紙に箔をうち散らしたる様に似たり。今宵はじめて見そめたる心地す。さきさきも星月夜見なれたるこごなれど、折からにや異なる心地するにつけても唯物のみおほゆ。

これほごに星月夜を讚美した散文韻文はこの外私の未だ日本文學にみかけない所である。紺紙に金銀砂子をちらしたやうな冬の真夜中のはれわたつた空を、追懷と愛着に満ちた彼女は見上げて、「たゞ物のみ覺ゆ」に嘆じた紺紙に箔を散らした様だに形容したのも、書道の家に生れた彼女として、始めて意味のある文句であつた。美しい意味に於てのお里をあらはしたものである。

文治元年十二月一日は太陽曆にするに、西曆一八五五年十二月三十一日に當るから、今日でいへば、先づ大晦日か元日あたりの深夜即ち午前二時頃の天界を、叡山の東麓から湖邊へかけて觀望したらば、右京大夫女の當年の氣分がいくらかうかゞはれる筈である。

まあ一端を想像して見るに、その時分オリオン座の大星ごもも、シリウス等と共に、もはや視界からは逸してしまつてゐたらうが、東方からは牧夫座の<sup>アルクトウルス</sup>大角や乙女座の<sup>スレカ</sup>角がのほつてゐたらう。北斗七星も無論だらう獅子座のアルファのレグルスは、その弱い光を既に中天に輝かしてゐたらう。蝸座の<sup>アンタレス</sup>大火、日本で中子星、支那で心宿二いふ、あのぎりりとしたやつは見えただらうか。

ごにかく物すごいはごに澄みわたつた冬空に、あゝいふ愛別、あゝいふ世變を経験した彼女が大星を、いはゆる「光こごごしき星の大きなが村もなく出でたる」を見上げた感情くらゐ高調に達したものはあるまい。